

Title	サンパン名義考
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.14, No.4 (1936. 3) ,p.74(612)- 74(612)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360300-0074

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サンパン名義考

支那や南洋の港を訪れた人は沖合に碇泊した船と波止場との間を往復してをる兩端の稍々反つた小舟—サンパンを記憶するだらう。此船名は南洋に於ても支那に於ても同様であり、どちらが本元であるかに就て意見が分れてをる。例のホブソン・ジョブソンの字書中にニールはジャバ、マレイ起原なるべしと云ひ、之に對しノーエル・ペリは此語がアメリカでも使はれた例を示してアメリカ起原説を唱へ、オールソーは唐詩の中に見ゆる「三版」を引いて支那起原説を主張した。問題はこれで解決せられた如く見ゆるが然し三版と云ふ語原から見て正當な文字があつたなら後世なぜ杉板・船板といろ／＼の宛字を使ひ、かつ支那人の間に普通語として使はれてゐなかつたのであらう。かつ西洋人がサンパンと云ふ名を使用し始めた時大船をも指してゐたことは明かである。さうすると七世紀代のスマトラ碑文からセデス氏の検出した舟を指して *sanvan* と云ひ、古代ジャバ語 *sambo*(*ng*)、マルガシユ *sambu* クメルにはいつて *samban* (*sampou*) シムムで *sambhan* (*sambhas*) となつた語とまんざら關係ないとは云はれなくなつてくる。更にモン語で *kabang* と云ふ舟を指す語があるが、之はマレイ半島山地土人の *kupou* (*boat*) と通ずる語でプレフィクスの *ka* 又は *ku* をとると語根は *bang* (*pon*) であらう。インドネシア語に於ける *sambong* も *sam* は恐らくプレフィクスでその語根は *bong* であり、各語で少しづつ形がくづれてをるが之が舟を指す語根で、オーストロアジア語の *bang* (*pon*) と相應するものと見るべきであらう。そしてかういふ形の南方語形が存在してをる一面、獨立して支那の方で *sampuan* と云ふ語形が發達してきたと見るのは少々疑はしくなつてくる。水經註三十六に見ゆる「崑崙單舸」の様に當時南方型小舟が支那人にも知られかつ使用されてをり、また崑崙人が水夫として使用されてゐたとすればさういふ小舸に舟を指す南方の外來語が轉移して保存されたと見てはいけなうであらうか、記して後考を待つ(松本信廣)。